

二〇二二年度

入学試験問題

(二月三日午後)

国語

- 一 開始の合図があるまで問題用紙・解答用紙にふれないでください。
- 二 開始の合図があったら、最初に問題用紙七ページ、**解答用紙二枚**を確認してください。
- 三 解答用紙に受験番号と氏名を記入してから始めてください。
- 四 問題についての質問は受け付けません。印刷のはっきりしないところや用事があるときは、声を出さずに手をあげてください。
- 五 字数が指定されている問題は、記号・句読点も一字として数えてください。
- 六 問題用紙は回収しません。
- 七 筆記用具の貸し借りはしないでください。
- 八 試験時間は五十分です。終了五分前になったら知らせます。
- 九 答案を書き終わっても座席からはなれないでください。

一 次の【I】【II】の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

【I】

現代は映像時代であり、テレビでもデジカメでもスマホでも、解像度の高さが機能の中心となっている。鑑賞に値する写真や動画の画質、あるいは映画を楽しむ際の3Dのクオリティなどは、当然、解像度が高いほうがいいに決まっている。

しかし、人間の脳の働きの側から見ると、話は変わってくる。

解像度が高いものを見れば見るほど人間のイメージネーションのレベルが下がってしまうからだ。すべてが詳細に見えてしまえば、あまい部分を想像する必要はない。

テレビやスマホで動画を見る機会が増えれば増えるほど、①その傾向に拍車がかかる。

酒井教授が脳の働きを解説しているように、次から次へと視覚に飛び込んでくる映像を処理することで精いっぱいになり、映像を見てイメージネーションを働かせる暇がない。いきおい、テレビや動画のつくり手側も、あまり受け手にイメージネーションを要求するようなことはしなくなる。

こうしたテレビの特徴をとらえて、カナダ出身のメディア学者マーシャル・マクルーハンは「クールメディア」と呼んだ。

私たちが日常生活のなかで受け取る情報量の7割以上は、視覚からの情報だという研究結果がある。テレビが視覚に訴えて現実に近

いものを見せてあげれば、視聴者はクールに納得しやすいということである。

これに対し、ラジオは声と音しか聴こえないメディアだ。限られた情報しか与えられないので、リスナーは想像力を大いにかき立てられる。それとともに感情が刺激され、②どんどんホットになっていく。そのため、マクルーハンはラジオを「ホットメディア」と呼んだ。

こうしてみると、読書はラジオと同様に、言葉を頼りに想像力をかき立てるメディアであるといえよう。なおかつ、読書は、（あ）的にインプットするラジオとは異なり、能動的に情報を取りにいかなければならない。「アクティブ・ラーニング（主体的な学習）」に適したメディアなのだ。

映像時代に生きる人々には矛盾して聞こえるかもしれないが、想像力を磨くためには、読書が必要だということ。テレビの構成作家や演出家がこぞって読書家であることがそれを証明している。

【II】

自分のやりたいことを実現させるうえで大切な、読書によって身につく力がある。それは「集中力」と「バランス感覚」だ。

この2つの資質は、できれば高校生あたりまでに身につけておきたい。早ければ早いほどいい。その後の人生で訪れるチャンスをものできる可能性が高まるからだ。

まずは「集中力」から考えてみよう。

私は、才能豊かな人や有能なビジネスパーソンに教え切れないほど会ってきた。どのような分野でも、成功した人やユニークなことをやって注目を集めている人は、例外なく集中力が高い。

集中力は、受験勉強をふくめた日々の勉強で身につけることができる。限られた時間のなかで一定量の知識を記憶したり、さまざまな問題を解いたりすることは、^③集中力を鍛える絶好の機会だ。何のために勉強するのか、という問いに対する答えのひとつでもある。

もちろん、勉強以外にも集中力を鍛錬する機会はある。

陰山英男先生の百マス計算を解くことでも、ピアノの練習をすることでも、サッカーの練習でもいい。これは直接的に計算力を高めたり、リズム感を養ったり、運動能力を磨いたりするためでなくともいいのだ。結果的にその分野の才能が開花することもあるとは思いますが、本当の目的は何か1つのことに集中する習慣を身につけること。

そして、もう1つ、集中力を磨く有効な手段として挙げたいのが読書である。

時間が経つのを忘れてたり、人の話が耳に入らないほど夢中になって本を読んだりした経験がだれにでもあるはず。読書を楽しむことが集中力の鍛錬になっているのだ。

もう1つの「バランス感覚」とは何だろうか。

人を褒めるとき、このバランス感覚という言葉がよく出てくる。

しかし、この言葉の意味を正確に把握して使っている人がどれほどいるだろうか。あらためて、バランス感覚という言葉の定義について、私なりの考えを示しておきたい。

ここでいうバランス感覚とは、自分と地面（地球）、自分と家族、自分と他者など、^④世の全体と自分との適切な距離感を保つことができる能力のことである。

最近の子どもたちはうまくバランスが取れていないように見える。それは、20代から30代の若者にも広がっている。

たとえば、自分と地面の関係でもそう。転んだときに手をつくことができず、顔から落ちて鼻の骨を折ってしまう子ども。加減がわからず、サッカーボールを蹴って骨折してしまう子ども。冗談のよくな話だが、実際に教育現場に立ってみて、こうしたケースが珍しくないことを知った。

コンクリートで埋め尽くされた都会では、子どもたちが安心して遊べる土や芝生の公園が減っている。いきおい、心配性の親たちは子どもたちを転ばせないよう、すぐに手を引いてしまう。思いきり転ぶ機会が極端に少なくなったため、周囲の物事と自分との関係性に身も心も揉まれていないのだ。

塾や習いごとで時間を取られて遊ぶ機会が減っていることも1つの要因だろう。

家のなかではテレビやゲームに興じ、外に出て友だちと集まって

もスマホやゲーム機器の画面を見続けている子どもが多い。彼らは、そこらじゅう駆け回って鬼ごっこや戦争ごっこをやるうとはしない。

バランス感覚は、テレビやゲームで身につくはずはない。私は、まずは体を使った遊びのなかで身につくと考えている。武雄市の教育改革でごいっしょした、幼児から小学生の教育で秀逸な実績のある「花まる学習会」高濱正伸代表も同じ考えのようだ。だから、外遊びやサマーキャンプで体を使ったチャレンジを重視する。

そういう遊びをしていなければ、どの程度の高さなら飛び降りても安全で、どの程度の高さだと危険なのかという判断基準を身につけることはできない。砂場や原っぱで相撲やプロレスごっこをやっているならば、自然と受け身を覚え、どの程度の力で投げたら危険かという感覚も身につくだろう。

自然をふくむ周囲の物事との関係性の欠如は、対人関係にも⑤多大な影響を及ぼす。逆にいえば、周囲の物事との空間的な感覚が、人間関係における距離感にも結びついてくるのだ。

子どもが小学校高学年から中学生になった段階で、スマホを持たせる家庭が多い。その年代の子どもに持たせると一気にのめり込ませてしまい、1日何時間もかけてメールやLINEで数百通のメッセージ交換する子どもも珍しくない。

なんとなく寂しいから画面をいじり続ける。少しでも間を空けると、友だちだったはずの相手から攻撃されてしまい、周囲の友だち

からも総攻撃を食らってしまふ。それが怖くて文字を打ち続ける。結果的に、ちょっと仲よくなると必要以上にベタベタした関係に陥ったり、反対に、少しでも何かあると⑥絶縁状態になったりする。ゼロか100、白か黒、○か×。微妙な「間」やグレーな「距離感」というあいまいな状態がなくなり、極端な二者択一の人間関係しか成り立たなくなる。

勉強や読書を通じて獲得した集中力も、バランス感覚がなければ極端な方向へ突っ走ってしまう原因になるだろう。その意味でも、10歳くらいまでは、遊びを通じたバランス感覚を意識することが大切なのだと思う。

バランス感覚は、それ以降の世代では、読書をするこゝで獲得することも可能だ。読書は、世界観を広げること役立つ。読書をすることで他人が体験したり調べたりした知識を獲得することが可能になり、自分の内なる世界観の拡大に結びつく。

世界観が広がれば、さまざまな視点で物事や他人を見ることができようになる。多様な視点を持つことは、バランス感覚を磨くとともに、人格的な包容力や寛容の基礎にもなるだろう。

(藤原和博『本を読む人だけが手にするもの』より)

問一 — 線部①「その傾向」とありますが、どのような傾向ですか。「〜ないという傾向」に続くかたちで本文中から十二字で抜き出して答えなさい。

問二 — 線部②「どんどんホットになっていく」の具体例として最もふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア この間映画を見に行ったんだけど、最新の映像技術で普段だったら絶対見ることはない実際のジャングルの様子をよく理解できたよ。

イ ねえ、この間スマートフォンでうちのネコの写真を撮ったの、これでいつでもうちのネコの可愛さを目に焼き付けられるわ。

ウ 行きたかった場所の旅行の体験記を読んでたら、自分だったらどんな旅行にしようかなあって遅くまでいろいろ考えちゃったよ。

エ 昨日どうしてもキリンの模様が思い出せなくて、わざわざ図書館で図鑑を見て模様がどうなっているかを確認しに行ったんだ。

問三 本文中の（ あ ）にあてはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア〜エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 想像 イ 受動 ウ 結果 エ 比較

問四 文章【Ⅱ】の中には次の一文が抜けています。どこに入りま
すか。直前の五字を抜き出して答えなさい。

しかし、それよりもはるかに大きな元凶は、テレビやゲームである。

問五 — 線部③「集中力を鍛える絶好の機会」とありますが、読書についてはどのような機会ですか。本文中から四十字以内で抜き出し、その始めと終わりの五字ずつを答えなさい。

問六 — 線部④「世の中全体と自分との適切な距離感を保つことができる能力」とありますが、それは何ですか。本文中にある具体例を用いて三十字以内で答えなさい。

問七 — 線部⑤「多大な影響」とありますが、どのような影響ですか。本文中から七字で抜き出して答えなさい。

問八

——線部⑥「絶縁^{えん}」とありますが、その意味として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他のものと縁^{えん}があること
- イ とぎれとぎれになっていること
- ウ とびぬけて高いこと
- エ 関係を断ち切ること

問九

文章【Ⅱ】の内容として正しいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 読書によって身につく「集中力」も「バランス感覚」も人間が生きる上でとても大切な能力なのでどの年代で獲得してもよい。
- イ 百マス計算やピアノやサッカーなどの練習の目的はそれらの能力を開花させることではなく、「集中力」を高めることだ。
- ウ 最近の子供たちは「集中力」や「バランス感覚」がなく、思わぬ怪我^{けが}をしてしまうことがあるので、保護者が注意して手助けすべきだ。
- エ 読書によって「バランス感覚」を身につけることで、他者の経験した知識も獲得^{かく}することができ、自分の視野を広げることができる。

問十

あなたが読書によって身につけたことを二百字以内で書きなさい。

二

次のカタカナの文章を読んで、漢字とひらがなと読点を正しく用いて書き直しなさい。

ニホンノシヨクリヨウジキユウリツテイカノリユウ
ノヒトツニコメノジユヨウノゲンシヨウガアゲラレ
マス。コメハニホンノシヨクブンカヲハダクミスイ
デンノウツクシイケイカンヤデントウブンカヲウミ
ダシテキマシタガゲンザイノウソンプノジンコウハ
ゲンシヨウシツツケテイルノデカイケツサクトシテ
ノウサンブツニコメタセイサンシヤノオモイヲシヨ
ウヒシヤニシラセルココロミガサレテイマス。

三

次の(1)～(5)の——線部の漢字をひらがなに、(6)～(10)の——線部のカタカナを漢字に改めなさい。

- (1) 事情に応じて善処する。
- (2) 感傷にひたる。
- (3) 友の勇姿を目に焼き付ける。
- (4) 利己的に行動する。
- (5) 著名人の生誕を祝う。
- (6) コウシ混同してはいけない。
- (7) 私のセンモンは国語学です。
- (8) 問題点をケントウする。
- (9) 布をサイダンする。
- (10) ナミキ道を散歩する。

四

次の文が①～⑤までつながるように、() にあてはまる言葉をあとのア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ言葉は入りません。

今日私はかさを持ってこなかった。

- ① ()、天気予報で雨が降るとは言っていなかったからだ。
- ② ()、昼過ぎから雨が降ってきた。
- ③ ()、私は放課後も学校の中で雨がやむのを待つことにした。
- ④ ()、風まで吹いてきて途方に暮れてしまった。
- ⑤ ()、少しでも小降りになったら、走って帰ろうと思う。

- ア さらに
- イ なぜなら
- ウ ところが
- エ だから
- オ もし

